

厚生労働科学研究費補助金（肝炎等克服緊急対策研究事業）
分担研究報告書

HCV 感染増殖細胞系の開発と阻害剤の探索

分担研究者 加藤 宣之 岡山大学 教授

研究要旨：C 型肝炎ウイルス(HCV)の培養細胞レベルでの増殖は、これまで遺伝子型 2a 等で成功しているが、遺伝子型 1b では実用的なレベルに至っていない。我々は、これまでに蓄積された HCV のライフサイクルに必要な宿主因子や HCV 複製を許容する各種ヒト細胞株を活用して、遺伝子型 1b に属する HCV 株の培養細胞レベルでの増殖系の開発を試みた。今年度は、ヒト不死化肝細胞などに HCV 感染や RNA 複製に必要な宿主因子を過剰発現させて HCV の感染実験を行った。その結果、低レベルの HCV 複製増殖は認められたものの、実用的レベルには至らず、更なる改良が必要であった。一方、我々がこれまでに開発した培養細胞を用いた抗 HCV 活性の評価系(OR6 や ORL8)を用いて、昨年度見出した抗 HCV 活性化化合物（抗マラリア薬として開発中の N-89 と N-251）について、フェーズ I 臨床試験の開始に必要なさらなる解析を行った。その結果、リバビリンの併用により相乗効果が得られることや40%血清中においても抗 HCV 活性が維持されることを示した。さらに、今年度は、抗 HCV 活性の評価系を用いて、無菌養蚕サナギタケ冬虫夏草（国内製造の市販品）に抗 HCV 活性を見出した。この活性はインターフェロン α やリバビリンの抗 HCV 活性と相加的に作用することやサナギタケ冬虫夏草に 5%程度含まれる核酸誘導体の Cordycepin に依るものであることを明らかにした。サナギタケ冬虫夏草は C 型慢性肝炎の治療における新規経口剤として有効であると考えられた。

A．研究目的

HCV の複製を効率よくかつ持続的に産生できる培養細胞はヒト肝癌細胞株である HuH-7 由来の細胞に限られていた。2009 年、我々は、HCV の複製が持続的に起こる新たなヒト肝癌細胞株 Li23 を見出し、この細胞株を用いて HCV RNA を効率的に複製している幾つかのクローン化細胞株の樹立に成功した。さらに、これらの細胞株を用いて抗 HCV 活性を簡便に定量評価できるアッセイ系（ORL8 と ORL11）も開発した。一方、培養細胞で容易に増殖できる HCV 株としては、依然として遺伝子型 1b（日本における主要な遺伝子型）に属する HCV 株を用いた増殖系が開発されていない。本研究においては、我々がこれまでに樹立した HCV RNA の複製を許容する細胞株に、これまでに得られている HCV 複製に必要な各種宿主因子の情報を基に工夫を加えることにより遺伝子型 1b の HCV が増殖する培養細胞系を開発する

ことを目標とした。これと並行して、抗 HCV 活性の評価系を用いて抗 HCV 活性を有する新たな化合物を探索し、副作用の少ない有望な経口阻害剤を見出すことを目標とした。

B．研究方法

(1) HCV 感染実験

各種細胞を 6 ウェルプレートにそれぞれ 5×10^4 個ずつ播き、一晚 37 度で培養した後、HCV 陽性血清（HCV-0 株）150 μ l (1.5×10^7 HCV ゲノム価相当) 或は陽性コントロールとして HCV JFH-1 株（遺伝子型 2a）由来の HCVcc (MOI 0.1 に相当する量) を添加した。3 時間培養した後、培地を除き PBS (1 ml) で 3 度細胞を洗い、それぞれのウェルに必要な培地 (3.5 ml) を加え培養を行った。7 日後（感染 7 日目）に培地を回収して、0.22 μ m のフィルターを通した後に、HCV Core の定量を ELISA 法により行った。細胞の方は、新し

い培地と交換し、翌日（感染 8 日目）に前日と同様の方法により培地を回収して HCV Core の定量を ELISA 法により行った。また、細胞の方は 2 つに分け、一方からは Total RNA を調製し、HCV RNA の定量を LightCycler を用いた RT-PCR 法により行った。もう一方は、継代用に使用して、細胞培養をさらに続け、一定期間後に、上述した方法により培養上清（Core の定量）や Total RNA（HCV RNA の定量）の調製を行った。

（ 2 ）細胞アッセイ系を用いた候補化合物の抗 HCV 活性評価

抗 HCV 活性の評価用の OR6 や ORL8 細胞など（24 ウェルプレートにそれぞれ 2×10^4 個）に候補化合物（各種濃度）を添加して 72 時間後にレニラルシフェラーゼ活性を測定した。得られた測定値より添加化合物の 50% 阻害濃度（ EC_{50} ）を算出した。細胞毒性については、別途 OR6 や ORL8 細胞など（96 ウェルプレートにそれぞれ 1×10^3 個）に候補化合物（各種濃度）を添加して 72 時間後に WST-1 アッセイを行った。得られた測定値から 50% 細胞毒性濃度（ CC_{50} ）を算出した。選択性指数（SI）は CC_{50}/EC_{50} にて算出した。

抗 HCV コアや NS5B 抗体を用いたウェスタンブロットは常法に従って行った。

（倫理面への配慮）

本研究においては、実験及び解析に用いた材料は全てこれまでに確立されているものである。HCV 陽性血清は 1995 年に契約に基づき横浜日赤より入手したものである。本年度の研究にはヒトの臨床材料を用いたものがない。そのために倫理面への特段の配慮はなかった。但し、実験に使用した細胞および核酸については蒸気滅菌を施した後に廃棄した。

C . 研究結果

（ 1 ）HCV 感染実験

昨年度、HCV-JFH1 に感受性を示すヒト肝癌 HuH-7 由来の細胞や過去の HCV 感染実験で HCV 感受性を報告した不死化ヒト肝 PH5CH8 細胞を用いて遺伝子型 1b の HCV 陽性血清による感染実験を行った。その

結果、感染 1 週間程度では、培養上清中に産生される HCV 量は、Core の ELISA 測定を検出限界（20 fmol/ml）に至らないことが明らかになった。また、この実験過程において、PH5CH8 細胞では、HCV 感染に必要であると報告されている宿主因子のうち、Claudin 1 (CLDN1) の発現レベルが JFH-1 株 HCV に感受性を示す RSc（HuH-7 由来の細胞株）や ORL8c（Li23 由来の細胞株）と比較すると 1/10 以下であることが分かった。

そこで、今年度は、この PH5CH8 細胞に CLDN1 を過剰発現させた細胞株を作成して HCV 感染実験を行うことにした。その前に、PH5CH8 細胞では、HCV の効率的な複製増殖に係わることが分かっている miR122 の発現レベルも RSc や ORL8c 細胞に較べて非常に低くなっていることが分かったので、まずは、PH5CH8 細胞に miR122 を過剰発現させた細胞を作成した後、その細胞に CLDN1 を過剰発現させることにした。レトロウイルス発現ベクターを用いて我々が通常行っている方法により、目的とする miR122 発現 PH5CH8 細胞（PH5CH8/miR122）や CLDN1 も併せて発現させた PH5CH8 細胞（PH5CH8/miR122/CLDN1）を作成した。HCV 感染実験には、これらの PH5CH8 細胞の他に、RSc 細胞、ORL8c 細胞および D7 細胞（ORL8c 細胞をさらにサブクローン化した細胞で HCV-JFH-1 感受性が高まっていることが分かっている）を用いた。HCV のソースとしては、HCV-JFH1（ 4×10^5 /ml の感染価を示す HCVcc）と HCV 陽性血清（0 株、 1×10^8 HCV ゲノム価/ml）を用いた。それぞれの細胞に HCV-JFH1 を MOI 0.1 で感染させた。その結果、感染 8 日目における培養上清中の Core の量（fmol/ml で表示）は、RSc 細胞で 61,000、ORL8c 細胞で 11,000、D7 細胞で 18,000 で、PH5CH8 細胞では miR122 や CLDN1 の発現の有無にかかわらず検出限界以下であった。感染 7 日目でも感染 8 日目と同様の数値が得られた。細胞内 HCV RNA の定量は LightCycler を用いた RT-PCR 法により行った。その結果、Core の定量結果と相関して、RSc、ORL8c およ

び D7 細胞では、 $4-6 \times 10^8$ copy/ μg total RNA の HCV RNA が検出された。

PH5CH8/miR122 細胞のみで 3×10^2 / μg total RNA の HCV RNA が検出されたが、それ以外の PH5CH8 細胞や PH5CH8/miR122/CLDN1 細胞では検出されなかった。

HCV 陽性血清（遺伝子型 1b の 0 株）を添加した場合での結果は、HCV-JFH-1 とはかなり異なっていた。感染 7 日目の培養上清中の Core は PH5CH8 細胞でのみ 70 fmol/ml という値を初めて示し、それ以外の細胞では検出限界以下であった。感染 8 日目の培養上清ではすべて検出限界以下であった。細胞内 HCV RNA のレベルは、PH5CH8 細胞で 7.1×10^2 、PH5CH8/miR122/CLDN1 細胞で 3.2×10^2 、ORL8c 細胞で 8.4×10^2 、D7 細胞で 3.9×10^2 copy/ μg total RNA であり、これら以外の細胞では検出されなかった。これらの結果から、JFH-1 株や 0 株 HCV の感受性は細胞により相当異なることが示唆された。さらに培養を続行して、感染後 17 日、23 日、29 日目の培養上清中の Core の定量と感染 29 日目の細胞内 HCV RNA の定量を行った。その結果、RSc、ORL8c および D7 細胞では 29 日目においても培養上清に Core (10^4 レベル fmol/ml)、細胞内に HCV RNA (10^7 - 10^8 レベル copy/ μg total RNA) が検出され、持続感染状態になっていることが分かった。しかしながら、PH5CH8 細胞系列からは、培養上清中の Core も細胞内の HCV RNA も検出されなかった。これらの結果から、HCV 陽性血清を用いた HCV 感染で持続感染状態を維持することは難しいこと、miR122 や CLDN1 は HCV 複製増殖の増強因子として作用していないことが示唆された。

(2) 細胞アッセイ系を用いた候補化合物の抗 HCV 活性評価

昨年度、強い抗 HCV 活性を見出した N-89 と N-251（いずれも抗マリア活性を有し、N-251 については、first in man に向けての毒性安全性試験などが岡山大学薬学部のグループにより進行中）のうち、N-251 は側鎖基を有することから、体

内動態や代謝等について解析可能である。そのため、C 型慢性肝炎患者への臨床応用を目指して、平成 25 年 5 月に PMDA で対面助言を受ける機会を得た。その結果、薬剤の承認までに幾つかの点（作用機序、代謝物の抗 HCV 活性、耐性ウイルスの選択性に関する検討、宿主タンパク質に対する相互作用）について、明らかにすることが必要であるとの見解が得られた。そのため、今年度は、これらの課題に関する実験を行った。

これまでに、N-251 はリバビリンと併用すると抗 HCV 活性は相加効果で予想される活性値より高い効果を示したことから、相乗効果であることが示唆されていた。相乗効果であるかどうかを明らかにするために、Isobole plot 解析法を用いて、N-251 とリバビリンとの併用効果を調べた。得られた結果は、当初の予想どおり、両薬剤の併用により抗 HCV 活性は相乗効果になることが明らかとなった。次に、ヒトの血液内を想定して、FBS40%存在下で抗 HCV 活性が低下することがないことを確認する実験を行った。その結果、40% FBS 存在下でも、 EC_{50} 値は $0.16 \mu\text{M}$ (10% FBS 存在下では $0.12 \mu\text{M}$) となり遜色ない値を示すことが分かった。さらに、40% FBS 存在下では、N-251 に対する細胞保護効果が観察され、SI 値は 106 (10% FBS 存在下では 19) と高まり、安全性の高い化合物であることが示唆された。耐性ウイルスの選択性に関する検討については、最初、ORL8 細胞に N-89 や N-251（いずれも $0.5 \mu\text{M}$ 程度）を連続的に投与する方法を用いて、耐性細胞の選択を試みた。しかしながら、この方法では、細胞は全滅し、耐性細胞を得ることは出来なかった。そこで、我々は、HuH-7 由来の HCV レプリコン複製 s0 細胞を 8 年間継代培養した s0(8Y) 細胞や Li23 由来の HCV レプリコン複製 s0L 細胞を 5 年間継代培養した s0L(5Y) 細胞に N-89 や N-251 を連続的に投与した。その結果、10 数回の連続投与により N-89 や N-251 に耐性を示す細胞が数種類得られた。現在、それらの細胞内で増殖している HCV の遺伝子解析を進めている。

我々が開発した HCV アッセイ系(数種類)を用いて、今年度も新規経口薬としての可能性を幾つかの市販品について評価を続けて来た。その過程で、サナギタケ冬虫夏草に中程度の抗 HCV 活性があることを見出した。サナギタケ冬虫夏草は、抗がん活性を有する混合化合物であり、米国ではがん患者に対する臨床試験が行われている。国内では、無菌養蚕システムで育てた蚕のサナギにサナギタケ菌を移付け、天然冬虫夏草と同じ環境のもと完熟まで育て収穫しており、市販品としてカプセル剤とドリンク剤がある。我々は両財形のサナギタケ冬虫夏草を入手し、それらの抗 HCV 活性を測定した。その結果、ORL8 アッセイではカプセル剤が抗 HCV 活性を有することを見出した。EC₅₀ 値は 54 µg/ml で SI 値は 5.6 以上であった。また、遺伝子型 1b の AH1 株を用いて作成した AH1R アッセイでも、EC₅₀ 値が 31 µg/ml で SI 値 5.2 となり、抗 HCV 活性が認められた。しかしながら、ドリンク剤の方にはまったく抗 HCV 活性は認められなかった。これらの結果から、サナギタケ冬虫夏草の財形により、活性が大きく異なることが示唆された。次に、カプセル剤に見出された抗 HCV 活性が、現行の肝炎治療に使用されている IFN-α やリビピリンの抗 HCV 活性と相加的あるいは相乗的に作用するかどうかを調べた。その結果、カプセル剤の抗 HCV 活性は、これら両薬剤と相加的に作用することが分かった。これにより、現行の治療効率を向上させることができることが示唆された。さらに、HCV RNA の両末端部と NS3 から NS5B 領域を有する HCV レプリコンが効率良く複製している細胞アッセイ系においても、カプセル剤が抗 HCV 活性を示すことが分かった。HuH-7 由来の sOR アッセイでは EC₅₀ 値が 12 µg/ml で SI 値が 3.8、Li23 由来の sORL8 アッセイでは EC₅₀ 値が 30 µg/ml で SI 値は 4.0 であった。これらの結果から、カプセル剤はサブゲノム RNA (レプリコン)の複製を阻害する活性を有することが分かった。

カプセル剤については、日本食品分析

センターから含有成分について公表されている。この情報から、抗 HCV 活性を示すのではないかと考えられる成分について、抗 HCV 活性の評価を行った。可能性のある成分としては、100 g 中、4.95g 含まれる Cordycepin (アデノシン誘導体) と 0.705g 含まれる Ergosterol (ステロールの一種) がその候補と考え、それぞれ合成物を別途入手して、これらの抗 HCV 活性を評価した。その結果、AH1R と sOR アッセイ系において、Cordycepin に抗 HCV 活性が認められた。AH1R アッセイ系における EC₅₀ 値が 0.58 µg/ml、SI 値 3.3、sOR アッセイ系においては、EC₅₀ 値が 1.7 µg/ml、SI 値 1.8 であった。AH1R アッセイ系では、カプセル剤の EC₅₀ 値が 31 µg/ml であったので、Cordycepin の含量(約 5%)で換算すると、1.5 µg/ml 程度と計算できる。従って、AH1R アッセイ系においては、カプセル剤が示す抗 HCV 活性をすべて Cordycepin の抗 HCV 活性で説明できることが分かった。しかしながら、sOR アッセイ系では Cordycepin の活性はカプセル剤全体の 50%程度しか説明できず、OR6 や ORL8 アッセイ系では細胞毒性が強く、明確な抗 HCV 活性を検出することができないということも分かった。Cordycepin とは対照的に Ergosterol は抗 HCV 活性や細胞毒性はほとんど検出されなかったことから、カプセル剤に認められる抗 HCV 活性には全く寄与していないことが分かった。以上の結果をまとめると、サナギタケ冬虫夏草のカプセル剤に見出された抗 HCV 活性の大部分は Cordycepin の作用に依るものであると推察された。

D. 考察

(1) HCV 感染実験

今年度の実験では、遺伝子型 1b の HCV 陽性血清だけではなく、培養細胞での HCV 感染実験に汎用されている遺伝子型 2a の JFH-1 株 HCV を使用して感染実験を行い、それぞれ得られた結果を比較した。その結果、JFH-1 株 HCV に関しては、これまで我々はその感受性細胞として樹立していた RSc、ORL8c および D7 細胞では約 1ヶ

月間、HCV の高い複製レベルを維持していることを確認した。しかしながら、ヒト不死化 PH5CH8 細胞においては、感染 7 日目には既に培養上清の Core や細胞内 HCV RNA は検出限界以下であった。ただ、かろうじて miR122 を過剰発現させた PH5CH8/miR122 細胞で HCV RNA が低レベル (10^2 コピー/mg total RNA) で検出されただけであった。その一方で、0 株 HCV 陽性血清を添加した場合には、PH5CH8 細胞でのみ感染 7 日目の培養上清に Core が検出された。JFH-1 株 HCV にはほとんど感受性を示さなかった PH5CH8 細胞で初めて Core が検出されたことは、やはり過去の感染実験で遺伝子型 1b の HCV に有効な細胞株として選択されていたことを意義づけるものであると考えられる。JFH-1 株 HCV に高い感受性を示す RSc 細胞などがまったく 0 株 HCV には感受性を示さないということは、これまでに報告されている感染受容体が 2a 型 HCV と 1b 型 HCV で異なっている可能性もある。CLDN1 は JFH-1 株 HCV の感染受容体として得られたものであることから、これを過剰発現させても感染複製効率に差がないというよりむしろ低下してしまうという現象からも、1b 型 HCV には必要ない因子である可能性や、他の未知の因子を必要とする可能性がある。今後は、PH5CH8 細胞の感染 7 日目で Core 陽性の培養上清をウイルスのソースとしてナイーブな PH5CH8 細胞に再感染させる実験やもう少しスケールアップした感染系で一時的に増殖した HCV を得るなどの実験を行う予定である。我々は、PH5CH8 以外にもヒト不死化細胞株を有しているの、それらにも感染実験を行う予定である。次年度は、初代ヒト肝細胞に HCV を感染させた後に、RSc や PH5CH8 細胞などで増殖させることができないかどうかを検討する予定である。

(2) 細胞アッセイ系を用いた候補化合物の抗 HCV 活性評価

N-89 や N-251 に耐性を示す HCV RNA 複製細胞を得る試みでは、樹立まもない HCV 遺伝子の多様性もほとんどない細胞では耐性細胞が得られず、長期に継代培養し

て、HCV 遺伝子の多様性を高めた細胞から耐性細胞が得られたことから、これらの細胞内の HCV 遺伝子の変異が耐性を獲得した原因である可能性がある。しかしながら、同時に、長期継代による細胞そのものの変化により耐性細胞が得られた可能性もあり、現時点ではどちらが主な原因であるかは判断できない。次年度は、耐性の原因がウイルス側なのか、宿主側なのかを判別できる実験を行う予定である。このようなアプローチにより、耐性の分子機構(裏を返せば N-89 や N-251 の作用機序)を明らかにできるのではないかと期待される。

今年度、抗 HCV 活性を見出したサナギタケ冬虫夏草のカプセル剤は、健康補助食品として市販されており、その安全性は確保されている。サナギタケの抗 HCV 活性は、インターフェロン やリバビリンの抗 HCV 活性と相加的に作用することも分かったことから、C 型慢性肝炎患者の治療中にも使用できる物質として興味深い。また、今回、サナギタケ冬虫夏草の活性の有効成分が Cordycepin であることが分かった。Cordycepin は、正常細胞には影響を与えることなく癌細胞に対する増殖抑制効果が報告されている。従って、我々のヒト肝癌細胞をベースにした評価系もその影響を受けて、 CC_{50} 値が低くなっている可能性がある。ただ、今回、ドリンク剤では細胞毒性が強く抗 HCV 活性を見出すことができなかった。ドリンク剤の成分が公表されていないため、どのような理由により活性が評価できなかったかは現時点では分からない。可能性としては、ドリンク剤の Cordycepin の含量が低いか或は不安定で分解していることも考えられる。サナギタケ冬虫夏草のような抗 HCV 活性を有する食品は他にも存在する可能性があるの、今後もさらに探索を進める予定である。

E. 結論

今年度のまとめを以下に示す。

(1) HCV 感染複製に必要な宿主因子を過剰発現させたヒト不死化肝細胞を用いて

HCV 感染実験を行ったが、HCV の複製レベルは低レベルであった。そのため、更なる改良が必要である。

(2) 抗 HCV 活性の評価系を用いて昨年度見出した化合物 N-251 について、更なる解析を行い、リバビリン併用による相乗効果や 40%血清中における抗 HCV 活性の維持を確認した。

(3) 抗 HCV 活性の評価系を用いて今年度は、無菌養蚕サナギタケ冬虫夏草のカプセル剤に抗 HCV 活性を見出した。この活性は、冬虫夏草に 5%程度含まれる Cordycepin の効果に依るものであることを明らかにした。

F. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Dansako H, Yamane D, Welsch C, McGivern DR, Hu F, Kato N, Lemon SM. Class A scavenger receptor 1 (MSR1) restricts hepatitis C virus replication by mediating toll-like receptor 3 recognition of viral RNAs produced in neighboring cells. *PLoS Pathogens*, 9: e1003345 (2013).
- 2) Mori K, Hiraoka O, Ikeda M, Ariumi Y, Hiramoto A, Wataya Y, Kato N. Adenosine kinase is a key determinant for the anti-HCV activity of ribavirin. *Hepatology*, 58:1236-1244 (2013).
- 3) Ueda Y, Takeda M, Mori K, Dansako H, Wakita T, Kim HS, Sato A, Wataya Y, Ikeda M, Kato N. New preclinical antimalarial drugs potently inhibit hepatitis C virus genotype 1b RNA replication. *PLoS ONE*, 8: e72519 (2013).
- 4) Shinohara Y, Imajo K, Yoneda M, Tomeno W, Ogawa Y, Kirikoshi H, Funakoshi K, Ikeda M, Kato N, Nakajima A, Saito S. Unfolded protein response pathways regulate Hepatitis C virus replication via modulation of autophagy. *Biochem Biophys Res Commun*, 432:326-332

(2013).

- 5) Tanaka T, Kuroda K, Ikeda M, Wakita T, Kato N, Makishima M. Hepatitis C virus NS4B targets lipid droplets through hydrophobic residues in the amphipathic helices. *J Lipid Res*, 54:881-892 (2013).
- 6) Sato A, Saito Y, Sugiyama K, Sakasegawa N, Muramatsu T, Fukuda S, Yoneya M, Kimura M, Ebinuma H, Hibi T, Ikeda M, Kato N, Saito H. Suppressive effect of the histone deacetylase inhibitor, suberoylanilide hydroxamic acid (SAHA), on hepatitis C virus replication via epigenetic changes in host cells. *J Cell Biochem*, 114:1987-1996 (2013).
- 7) Tani J, Shimamoto S, Mori K, Kato N, Moriishi K, Matsuura Y, Tokumitsu H, Tsuchiya M, Fujimoto T, Kato K, Miyoshi H, Masaki T, Kobayashi R. Ca²⁺/S100 proteins regulate HCV virus NS5A-FKBP8/FKBP38 interaction and HCV virus RNA replication. *Liver Int*, 33:1008-1018 (2013).
- 8) Tanaka T, Kuroda K, Ikeda M, Kato N, Shimizu K, Makishima M. Direct targeting of proteins to lipid droplets demonstrated by time-lapse live cell imaging. *J Bioscience and Bioengineering*, 116:620-623 (2013).
- 9) Ding Q, Cao X, Lu J, Huang B, Liu YJ, Kato N, Shu HB, Zhong J. Hepatitis C virus NS4B blocks the interaction of STING and TBK1 to evade host innate immunity. *J Hepatol*, 59:52-58 (2013).
- 10) Shinohara Y, Imajo K, Yoneda M, Tomeno W, Ogawa Y, Fujita K, Kirikoshi H, Takahashi J, Funakoshi K, Ikeda M, Kato N, Nakajima A, Saito S. Hepatic triglyceride lipase plays an essential role in changing the lipid metabolism in genotype 1b

- hepatitis C virus replicon cells and hepatitis C patients. *Hepatol Res*, 43:1190-1198 (2013).
- 11) Ban S, Ueda Y, Ohashi M, Matsuno K, Ikeda M, Kato N, Miyachi H. Peroxisome proliferator-activated receptor delta antagonists inhibit hepatitis C virus RNA replication. *Bioorg. Med. Chem. Letters*, 23:4774-4778 (2013).
 - 12) Shen H, Yamashita A, Nakakoshi M, Yokoe H, Sudo M, Kasai H, Tanaka T, Fujimoto Y, Ikeda M, Kato N, Sakamoto N, Shindo H, Maekawa S, Enomoto N, Tsubuki M, Moriishi K. Inhibitory effects of caffeic acid phenethyl ester derivatives on replication of hepatitis C virus. *PLoS ONE*, 8:e82299 (2013).
 - 13) Kato N, Sejima H, Ueda Y, Mori K, Satoh S, Dansako H, Ikeda M. Genetic characterization of hepatitis C virus in long-term RNA replication using Li23 cell culture systems. *PLoS ONE*, in press (2014).
2. 学会発表
- 1) 上田優輝、森京子、團迫浩方、池田正徳、加藤宣之. 中国由来の漢方薬であるサナギタケ(北冬虫夏草)に見出された抗 HCV 活性. 第 49 回日本肝臓学会総会、東京、2013 年 6 月.
 - 2) 篠原義康、留野渉、米田正人、今城健人、小川祐二、桐越博之、池田正徳、加藤宣之、前田慎、中島淳、斉藤聡. C 型肝炎ウイルスによる肝性中性脂肪リパーゼの発現に及ぼす影響について. 第 17 回日本肝臓学会大会 (JDDW)、東京、2013 年 10 月.
 - 3) Ueda Y, Mori K, Satoh S, Dansako H, Ikeda M, Kato N. Anti-HCV activity of *Cordyceps militaris* used as a chinese herbal medicine. 20th International Meeting on Hepatitis C Virus and Related Viruses. Melbourne, Australia, October, 2013.
 - 4) Dansako H, Hiramoto H, Ikeda M, Wakita T, Kato N. Rab18 is required for viral assembly of hepatitis C virus through the association with core protein around lipid droplet. 20th International Meeting on Hepatitis C Virus and Related Viruses. Melbourne, Australia, October, 2013.
 - 5) 上田優輝、森京子、佐藤伸哉、團迫浩方、池田正徳、加藤宣之. 抗 HCV 活性を有する中国由来の漢方薬であるサナギタケ(北冬虫夏草). 第 61 回日本ウイルス学会学術集会、神戸、2013 年 11 月.
 - 6) 平本洗貴、團迫浩方、瀬島寛恵、森京子、佐藤伸哉、池田正徳、脇田隆字、加藤宣之. C 型肝炎ウイルスのライフサイクルにおける宿主因子 annexin A1 の役割. 第 61 回日本ウイルス学会学術集会、神戸、2013 年 11 月.
 - 7) 團迫浩方、平本洗貴、池田正徳、脇田隆字、加藤宣之. Rab18 は C 型肝炎ウイルスの感染性粒子形成に重要な宿主因子である. 第 61 回日本ウイルス学会学術集会、神戸、2013 年 11 月.
 - 8) 田中寅彦、山本真民、黒田和道、脇田隆字、池田正徳、加藤宣之、槇島誠. C 型肝炎ウイルス NS4B の両親媒性ヘリックス内疎水性残基がウイルス複製に果たす役割. 第 61 回日本ウイルス学会学術集会、神戸、2013 年 11 月.
- G. 知的財産権の出願・登録状況
1. 特許出願
 - なし
 2. 実用新案登録
 - なし
 3. その他
 - なし

HCV における脱ユビキチン化酵素の役割

分担研究者 松浦善治 大阪大学微生物病研究所 教授

研究要旨：脱ユビキチン化酵素はタンパク質のユビキチン化の逆反応を担う酵素であり、タンパク質の安定化や様々なシグナル伝達を介して、癌や免疫応答等の様々な生理現象に関与することが近年報告されている。しかしながら、HCV 感染における脱ユビキチン化酵素の役割は不明な点が多い。本研究では、脱ユビキチン化酵素を網羅的にノックダウンし、HCV の複製への影響を検討することで、脱ユビキチン化酵素の USP15 と USP20 が HCV 複製に関与することを見いだした。USP15 は、脂肪滴の形成や維持に、また、USP20 は膜間輸送に関与する分子であり、HCV だけでなく日本脳炎ウイルスの複製にも関与することが示された。

A. 研究目的

HCV に感染すると高率に慢性化し、肝硬変を経て肝細胞癌を発症する。ペグ化 IFN とリバビリンの併用により治療効果に改善が認められているが、遺伝子型 1b 型の高ウイルス価の難治性 C 型肝炎患者に対する著効率は 50%程度である。ウイルスのプロテアーゼやポリメラーゼ阻害剤が有用であることが明らかとなってきたが、耐性ウイルスの出現は明白であり、HCV の複製に必須な宿主因子を標的とすることが、抗ウイルス治療において最も有用な手段であると考えられる。脱ユビキチン化酵素は生体内で様々な生理現象に関与しており、癌研究においてその役割の重要性が認識され、近年様々な脱ユビキチン化酵素阻害剤が開発されている。一方、ウイルス感染における脱ユビキチン化酵素の役割に対する知見は乏しいことから、HCV 複製において重要な脱ユビキチン化酵素を同定し、その脱ユビキチン化酵素を標的とした、抗 HCV 薬開発の可能性を検討することを目的とした。

B. 研究方法

レトロウイルスベクターを用いて各脱ユビキチン化酵素の shRNA ノックダウン Huh7 細胞株を作製し、HCVcc を感染させて複製に及ぼす効果を検討した。さらに、HCV 複製への関与後示された脱ユビキチン化酵素の USP15 と USP20 に関しては、人工ヌクレアーゼを用いて遺伝子欠損 Huh7 細胞株を樹立した。

（倫理面への配慮）

本研究にあたっては、試料提供者、その家族、および同様の肝疾患患者の人権、尊厳、利益が保護

されるよう十分に配慮する。具体的には、厚生労働省等で検討されている「ヒトゲノム解析研究に関する共通指針」に則り各研究実施機関の医学研究倫理審査委員会に申請し、インフォームドコンセントに係る手続きを実施し、また提供試料、個人情報厳格に管理、保存する。

C. 研究結果

昨年度我々は、RNAi スクリーニングにより、HCV 複製に関わる新規宿主因子として、脱ユビキチン化酵素の USP15 と USP20 を同定した。USP15 や USP20 のノックダウン細胞では顕著に HCV 複製が抑制された。USP15 がない肝癌細胞株では脂肪滴が顕著に減少し、過剰発現させると脂肪滴形成が亢進した。USP20 欠損細胞では、HCV 複製だけでなく、日本脳炎ウイルスの複製も顕著に抑制した。

D. 考察

USP15 は肝臓内で脂肪滴の形成や維持に関与することが示唆された。今後は、USP15 の脂肪滴形成の分子機構を解明する。さらに、USP20 の機能についても検討を行いたい。

E. 結論

脱ユビキチン化酵素を標的とする化合物は、HCV だけでなく、広範囲のウイルスに対して抗ウイルス効果を示す可能性が示唆された。

F. 健康危険情報

特になし。

G. 研究発表

1. 論文発表

1. Katoh H, Okamoto T, Fukuhara T, Kambara H, Morita E, Mori Y, Kamitani W, and Matsuura Y. Japanese Encephalitis Virus Core Protein Inhibits Stress Granule Formation through an Interaction with Caprin-1 and Facilitates Viral Propagation. *J Virol* 2013;87:489-502
 2. Suzuki R, Matsuda M, Watashi K, Aizaki H, Matsuura Y, Wakita T, and Suzuki T. Signal peptidase complex subunit 1 participates in the assembly of hepatitis C virus through an interaction with E2 and NS2. *PLoS Pathog* 2013;(doi: 10.1371/journal.ppat.1003589)
 3. Lee H, Komano J, Saitoh Y, Yamaoka S, Kozaki T, Misawa T, Takahama M, Satoh T, Takeuchi O, Yamamoto N, Matsuura Y, Saitoh T, and Akira S. Zinc-finger antiviral protein mediates retinoic acid inducible gene I-like receptor-independent antiviral response to murine leukemia virus. *Proc Natl Acad Sci U S A* 2013;110:12379-12384
 4. Yoshio S, Kanto T, Kuroda S, Matsubara T, Higashitani K, Kakita N, Ishida H, Hiramatsu N, Nagano H, Sugiyama M, Murata K, Fukuhara T, Matsuura Y, Hayashi N, Mizokami M, and Takehara T. Human BDCA3 (+) dendritic cells are a potent producer of IFN- α in response to hepatitis C virus. *Hepatology* 2013;57:1705-1715
 5. Kimura T, Katoh H, Kayama H, Saiga H, Okuyama M, Okamoto T, Umemoto E, Matsuura Y, Yamamoto M, and Takeda K. Ifit1 inhibits Japanese encephalitis virus replication through binding to 5' capped 2'-O unmethylated RNA. *J Virol* 2013;87:9997-10003
 6. Tripathi LP, Kambara H, Chen YA, Nishimura Y, Moriishi K, Okamoto T, Morita E, Abe T, Mori Y, Matsuura Y, and Mizuguchi K. Understanding the biological context of NS5A-host interactions in HCV infection: a network-based approach. *J Proteome Res* 2013;12:2537-2551
2. 学会発表
1. 岡本 徹、岡本貴世子、森 嘉生、福原崇介、森石恆司、松浦善治、C型肝炎ウイルスコア蛋白質の膜内配列切断の生物学的意義、第86回日本生化学会シンポジウム「非常識なプロテアーゼ反応：膜内部でのタンパク質切断」、横浜、9月11-13日、2013
 2. Toru Okamoto, Shuhei Tagawa, Kohji Moriishi, and Yoshiharu Matsuura. Co-chaperones involved in the replication of hepatitis C virus, *Protein Homeostasis & Viral Infection: Mechanisms to Therapeutics*, Bethesda, USA, September 18-19, 2013.
 3. Yoshiharu Matsuura, Host factors involved in HCV propagation. The 2013 Italy-Japan Liver Workshop “Hepatitis, Steatosis and Hepatocellular Carcinoma : molecular basis and clinical links” Marsala, Italy, October 20-21, 2013.
 4. Yoshiharu Matsuura, Host factors involved in the propagation and pathogenesis of hepatitis C virus, *Infectious Diseases in Elderly Symposium*, Izmir, Turkey, October 25-29, 2013.
 5. Yoshiharu Matsuura, Host factors involved in the propagation and pathogenesis of hepatitis C virus, *The 3rd International Symposium on Infectious Disease and Signal Transduction and Taiwan-Japan Joint Symposium on Cell Signaling and Gene Regulation*, Tainan, Taiwan, November 16-17, 2013
 6. 松浦善治、C型肝炎ウイルスの複製と病原性発現に關与する宿主因子の解析と創薬の可能性、第42回ヒューマンサイエンス総合研究セミナー、東京、12月9日、2013
 7. Takasuke Fukuhara, Satomi Yamamoto, Takashi Motomura, Mai Shiokawa, Chikako Ono, Hiroto Kambara, Toru Okamoto, and Yoshiharu Matsuura, Role of HCV-RNA quasispecies on the cell-specific infectivity. *The American Society for Virology, 32nd Annual Meeting*, University of Pennsylvania, University Park, July 20-24, 2013.
 8. Toru Okamoto, Yukari Sugiyama, Chikako Ono, Sayaka Aizawa, Pham Duc Ngoc, Takahisa Kohwaki, Eiji Hirooka, Takasuke Fukuhara, Masahiro Yamamoto, and Yoshiharu Matsuura,

Roles of de-ubiquitinating enzymes on the propagation of HCV, 20th International Meeting on HCV and Related Viruses, Melbourne, October, 6-10, 2013.

9. Takasuke Fukuhara, Satomi Yamamoto, Mai Shiokawa, Masami Wada, Chikako Ono, Toru Okamoto, and Yoshiharu Matsuura, Role of HCV-RNA quasispecies on the cell-specific infectivity, 20th International Meeting on HCV and Related Viruses, Melbourne, October, 6-10, 2013.
10. Chikako Ono, Takasuke Fukuhara, Mai Shiokawa, Satomi Yamamoto, Masami Wada, Toru Okamoto, Daisuke Okuzaki, and Yoshiharu Matsuura, Propagation of HCV in the miR-122-knockout Huh7 cells, 20th International Meeting on HCV and Related Viruses, Melbourne, October, 6-10, 2013.
11. 福原 崇介、塩川 舞、小野 慎子、山本 聡美、和田 真実、岡本 徹、野田 健司、吉森 保、松浦 善治、HCV 感染により誘導されるオートファジーの性状、第 61 回日本ウイルス学会総会、神戸、11 月 10 日-12 日、2013
12. 小野慎子、福原崇介、塩川 舞、山本 聡美、和田真実、岡本 徹、奥崎大介、松浦 善治、miR-122 ノックアウト Huh7 細胞における HCV 増殖、第 61 回日本ウイルス学会総会、神戸、11 月 10 日-12 日、2013
13. 和田真実、福原崇介、山本聡美、塩川 舞、小野慎子、岡本徹、松浦善治、C 型肝炎ウイルスの粒子産生における VLDL 関連タンパク質の役割、第 61 回日本ウイルス学会総会、神戸、11 月 10 日-12 日、2013

H. 知的所有権の出願・登録状況
特になし。

厚生労働科学研究費補助金（肝炎等克服緊急対策研究事業）
分担研究報告書

HCV 感染および肝がん発症におけるイムノフィリンの役割と
それを標的にした化合物開発

分担研究者：森石恆司 山梨大学医学部 教授

研究要旨：ウイルス因子および宿主因子を利用してC型肝炎ウイルス(HCV)のウイルスゲノム複製は成り立っている。我々は、NS5Aに相互作用する宿主因子としてFKBP6を同定している。本研究では、その阻害剤の効果と肝臓組織における発現を解析した。ウイルス複製はFKBP6をノックダウンすると低下し、FKBP8にFKBP6は相互作用する。既知のHCV宿主因子であるFKBP8を標的としたDM-CHXは、FKBP6のホモ多量体形成を阻害し、FKBP8とのヘテロ多量体形成も阻害した。また、FKBP6の肝臓内発現は、非がん部ではクッパーおよび胆管上皮細胞に強く発現し、肝細胞でほとんど発現していなかった。しかし、HCV感染している肝細胞でFKBP6の発現は上昇し、がん部でFKBP6の発現は上昇していた。以上の結果から、FKBP6の発現はHCV感染と肝がん化と関連していることが示唆された。また、低分子化合物DM-CHXがFKBP6の機能を阻害することがわかった。本研究の成果は、抗HCV剤および新規治療薬の開発に繋がるものと思われる。

A. 研究目的

世界で二億人、国内で約150-200万人のC型肝炎ウイルス(HCV)の感染者が推定されている。血液などを介して、HCVはヒトに感染し、高率に持続感染に移行する。持続感染患者は、慢性肝炎から肝硬変を経て、高い確率で肝細胞癌を発症する。本邦の肝癌の約7-8割は、HCV感染に起因すし、高ウイルス量タイプのウイルス遺伝子型1の感染者に対する治療法は完全に確立されたとはいえない。新規NS3プロテアーゼ抑制剤の登場により、より高い著効率が期待できるようになったが、副作用や耐性ウイルスの出現、ウイルス排除後の肝がん発症などから、今後も新規抗HCV剤開発は必要である。

フラビウイルス科に属するHCVはプラス鎖RNAゲノムを持つエンベロープウイルスである。そのウイルスゲノムに単一のポリプロテイン前駆体がコードされており、宿主およびウイルスプロテアーゼによって切断を受け、10個のウイルス蛋白質に成熟する。C末端側2/3の領域に非構造蛋白質がコードされ、ウイルスゲノム複製に機能する。

HCVの非構造蛋白質であるNS5Aはウイルスゲノム複製、粒子形成に関与する蛋白質で、病原性にも関与するとされる。我々は、以前、イムノフ

ィリン蛋白質である宿主蛋白質FKBP8を報告している。しかしながら、そのFKBP8に非依存的に複製するレプリコン細胞を見つけ、その細胞にFKBP8と同じ蛋白質ファミリーであるFKBP6が高発現していることを報告している。また、FKBP8を標的にした阻害剤DM-CHXがFKBP8非依存レプリコン細胞のウイルス複製を抑制することを報告している。

本研究では、FKBP6のがん化とウイルス感染との関連性をin vivoで検証し、さらにDM-CHXの作用機構について解析した。

B. 研究方法

HCV NS5Aを発現あるいはJFH1ウイルス株を感染させ、細胞内FKBP6/8あるいは強制発現したFKBP8/6との相互作用を免疫沈降法で解析した。また、細胞内局在の解析は、蛍光抗体法により染色した細胞を、共焦点レーザー顕微鏡で解析した。また、市販のTissue micro arrayを免疫染色し、HCV感染とFKBP6発現との関連性について検討した。

(倫理面への配慮)

本研究にあたっては、試料提供者、その家族、

および同様の肝疾患患者の人権、尊厳、利益が保護されるよう十分に配慮する。具体的には、厚生労働省等で検討されている「ヒトゲノム解析研究に関する共通指針」に則り各研究実施機関の医学研究倫理審査委員会に申請し山梨大学医学部倫理委員会規程に従って承認を得る。インフォームドコンセントに係る手続きを実施し、また提供試料、個人情報を厳格に管理、保存する。動物実験は、山梨大学動物実験規程に従って、山梨大学学長の承認を得て行う。遺伝子組み換え実験は、山梨大学遺伝子組み換え実験安全管理規程に従って、山梨大学学長の承認を得て行う。放射線及び放射性同位元素を扱う実験は、山梨大学総合分析実験センター放射線障害予防規程に従って、山梨大学学長の承認を得て行う。

C. 研究結果

以前、FKBP8 が HCV ゲノム複製に必要な宿主因子であることを報告し、FKBP8 ノックダウン耐性レプリコン細胞が FKBP6 ノックダウンによってウイルス複製が抑制されることが分かっている。FKBP6 と FKBP8 が多量体形成し、細胞内局在は一致した。FKBP8 を標的にした化合物 DM-CHX をレプリコン細胞に投与するとウイルス複製が有意に抑制された。また、DM-CHX の添加によって、FKBP8 と FKBP6 のホモ・ヘテロ多量体形成が抑制された。FKBP6 の肝臓内発現は、非がん部ではクッパーおよび胆管上皮細胞に強く発現し、肝細胞でほとんど発現していなかった。しかし、HCV 感染している肝細胞で FKBP6 の発現は上昇し、がん部で FKBP6 の発現は有意に上昇していた。また、HBV 感染と FKBP6 の発現に関連性がないことが分かった。

D. 考察

本研究で、低分子化合物 DM-CHX が抗 HCV 活性をもち、FKBP6/8 の多量体形成を標的にしていることが示唆された。従って、ウイルス複製に FKBP6/8 の機能が必須であり、NS5A との結合でそれが機能していると考えられた。がん部で FKBP6 が高発現しており、肝細胞がんと関連が考えられる。また、

HCV 感染によって FKBP6 発現が誘導されることが示唆され、感染後、FKBP6 発現によって HCV 感染が安定化されることが示唆された。FKBP6 は感染およびがん化で誘導されることから、C 型肝炎療法の一環として標的にすることが期待された。

E. 結論

本研究によって、HCV 感染によって FKBP6 が誘導され、感染が維持されているものと考えられた。また、がん化と FKBP6 との関連も指摘され、今後の解析が重要である。さらに、本研究によって、DM-CHX の標的となるウイルス複製ステップが分かり、今後の抗ウイルス剤開発に有用な情報を提供した。

F. 健康危険情報

特になし。

G. 研究発表

1. 論文発表

1. Tripathi LP, Kambara H, Chen YA, Nishimura Y, Moriishi K, Okamoto T, Morita E, Abe T, Mori Y, Matsuura Y, Mizuguchi K: Understanding the Biological Context of NS5A-Host Interactions in HCV Infection: A Network-Based Approach. *J. Proteome Res.*, 12: 2537-2551, 2013
2. Tani J, Shimamoto S, Mori K, Kato N, Moriishi K, Matsuura Y, Tokumitsu H, Tsuchiya M, Fujimoto T, Kato K, Miyoshi H, Masaki T, Kobayashi R: Ca(2+)/S100 proteins regulate HCV virus NS5A-FKBP8/FKBP38 interaction and HCV virus RNA replication. *Liver Int.*, 33: 1008-1018, 2013
3. Ogawa Y, Kawamura T, Matsuzawa T, Aoki R, Gee P, Yamashita A, Moriishi K, Yamasaki K, Koyanagi Y, Blauvelt A, Shimada S: Antimicrobial Peptide LL-37 Produced by HSV-2-Infected Keratinocytes Enhances HIV Infection of Langerhans Cells. *Cell Host Microbe*, 13: 77-86, 2013
- Miura M, Maekawa S, Takano S, Komatsu N, Tatsumi A, Asakawa Y, Shindo K, Amemiya F, Nakayama Y, Inoue T,

Sakamoto M, Yamashita A, Moriishi K, Enomoto N: Deep-Sequencing Analysis of the Association between the Quasispecies Nature of the Hepatitis C Virus Core Region and Disease Progression. *J. Virol.*, 87: 12541-12551, 2013

Matsuzawa T, Kawamura T, Ogawa Y, Takahashi M, Aoki R, Moriishi K, Koyanagi Y, Gatanaga H, Blauvelt A, Shimada S: Oral administration of the CCR5 inhibitor, maraviroc, blocks HIV ex vivo infection of Langerhans cells within epithelium. *J. Invest. Dermatol.*, 133:2803-2805, 2013

Hashimoto K, Yamada S, Katano H, Fukuchi S, Sato Y, Kato M, Yamaguchi T, Moriishi K, Inoue N: Effects of immunization of pregnant guinea pigs with guinea pig cytomegalovirus glycoprotein B on viral spread in the placenta. *Vaccine*, 31: 3199-3205, 2013

Aoki R, Kawamura T, Goshima F, Ogawa Y, Nakae S, Nakao A, Moriishi K, Nishiyama Y, Shimada S: Mast Cells Play a Key Role in Host Defense against Herpes Simplex Virus Infection through TNF-alpha and IL-6 Production. *J. Invest. Dermatol.*, 133: 2170-2179, 2013

Shen H, Yamashita A, Nakakoshi M, Yokoe H, Sudo M, Kasai H, Tanaka T, Fujimoto Y, Ikeda M, Kato N, Sakamoto N, Shindo H, Maekawa S, Enomoto N, Tsubuki M, Moriishi K: Inhibitory effects of caffeic Acid phenethyl ester derivatives on replication of hepatitis C virus. *PLOS one*, 8: e82299, 2013

2. 学会発表

Tanaka T, Kasai H, Yamashita A, Moriishi K. 20th International Symposium on Hepatitis C virus and related viruses. Melbourne, Australia, October 6-10., 2013

Moriishi K. Exploitation of host functions by hepatitis C virus. 2013 Italy-Japan Liver Workshop “Hepatitis, Steatosis and Hepatocellular Carcinoma: molecular basis and clinical links”, Trapani, Italy, October 20-21, 2013

葛西宏威、吉村健太郎、安本順、山下篤哉、田中智久、竹田扇、森石恆司。Probe electrospray

Ionization 質量分析法 (PESI-MS) を用いた HCV 感染細胞内脂質組成の解析。第 61 回日本ウイルス学会学術集会、2013 年 11 月 10 日～12 日、神戸

山下篤哉、沈暉、田中智久、葛西宏威、森石恆司。Caffeic acid phenethyl ester とその類縁化合物による HCV ゲノム複製阻害。第 61 回日本ウイルス学会学術集会、2013 年 11 月 10 日～12 日、神戸

1. 安本順、葛西宏威、吉村健太郎、山下篤哉、田中智久、竹田扇、森石恆司、B 型肝炎ウイルス感染による宿主細胞の超微形態変化の解析、第 61 回日本ウイルス学会学術集会、2013 年 11 月 10 日～12 日、神戸
 2. 田中智久、葛西宏威、山下篤哉、森石恆司、日本産ウマの血清から分離した non-primate hepacivirus の性状解析、第 61 回日本ウイルス学会学術集会、2013 年 11 月 10 日～12 日、神戸
 3. 森石恆司、教育セミナー：HCV に近縁なヘパシウイルスの構造と日本産ウマからの検出、第 61 回日本ウイルス学会学術集会、2013 年 11 月 10 日～12 日、神戸
- 天野稜大、山下篤哉、葛西宏威、田中智久、前川伸哉、榎本信幸、津吹政可、森石恆司、Tyrphostin とその類縁化合物による C 型肝炎ウイルス複製阻害、第 36 回日本分子生物学会年会、2013 年 12 月 3 日～6 日、神戸

H. 知的所有権の出願・登録状況
特になし

ユビキチンおよびユビキチン様蛋白質による HCV 複製制御機構の研究

研究分担者 勝二郁夫 神戸大学大学院医学研究科微生物学分野 准教授

研究要旨：ユビキチンおよびユビキチン様蛋白質による C 型肝炎ウイルス（HCV）複製制御機構について解析した。HCV NS5A 蛋白質がインターフェロン刺激により ISG15 による修飾 (ISGylation) を受けるが、Herc5 が E3 リガーゼとして働くことを明らかにした。また、HCV genotype 1b の Con1, 0 株、2a の JFH1 株いずれの NS5A も ISGylation を受けた。ISGylation 部位を解析するため、Lys 残基を Ala 残基に置換した NS5A 変異体を作製したところ、複数箇所が ISGylation を受けることが示された。さらに NS5A 変異体を作製して ISGylation 部位の同定を行っている。また、NS5A と相互作用を示す脱ユビキチン化酵素として OTUD7B を同定した。両者の相互作用には NS5A の domain I が重要であり、OTUD7B の脱ユビキチン化酵素活性の促進を介して NF- κ B 経路を抑制する可能性が示された。

A. 研究目的

C 型肝炎治療は NS3/4A セリンプロテアーゼ阻害薬が承認され、Direct Acting Antivirals (DAA) の時代に突入したが、治験中の次世代薬を含め、耐性ウイルスの出現や重篤な副作用による治療の中断が懸念されている。そのため、DAA とは異なる作用機序をもった新規抗ウイルス薬の開発が望まれている。HCV 蛋白質がユビキチンや ISG15 で修飾され、ウイルス増殖が調節されることが知られているが、未だ詳細は不明である。そこで、ユビキチン-プロテアソーム系および ISG15 系による HCV 増殖制御の分子機構を明らかにし、新規抗 HCV 薬開発のための分子基盤の構築を目指した。

B. 研究方法

1. Huh7細胞における ISG15の誘導

ヒト肝癌細胞株 Huh-7 細胞に IFN- α または IFN- γ を添加し 24 時間後に細胞を回収し、内在性の ISG15, UBE1L, UbcH8, Herc5 の発現をウエスタンブロット法で解析した。

2. HCV 感染による ISGylation 系の誘導

Huh-7 細胞に HCV J6/JFH1 を MOI=2 で感染させ、0 時間、48 時間後の ISG15, Herc5 の発現を real time PCR 法にて解析した。

3. NS5A を ISGylation する E3 の解析

Huh-7 細胞に UBE1L, UbcH8, FLAG-ISG15 および TRIM25 または Herc5 を一過性に発現させ、NS5A の ISGylation を免疫沈降法およびウエスタンブロット法で解析した。

4. HCV NS5A の ISGylation の解析

Con1, 0 (genotype 1b), JFH1 (genotype 2a) をプラスミド pEF1A-NS5A-myc-His₆ として発現させ、ISGylation を解析した。

5. NS5A ISGylation 部位の解析

NS5A K-R 変異体を myc-His₆ の形で発現させ、E1, E2, E3, FLAG-ISG15 を Huh-7 細胞に発現させ、FLAG-ISG15 が付加される部位を免疫沈降法およびウエスタンブロット法で解析した。

6.HCV NS5A 蛋白質と脱ユビキチン化酵素 OTUD7B の相互作用解析
Huh-7 細胞に FLAG-OTUD7B と NS5A-myc-His₆ を一過性に発現させ、免疫沈降法により相互作用を解析した。

7.HCV NS5A 上の OTUD7B との相互作用に重要な部位の解析

NS5A の各種 deletion mutant を用いて、NS5A 上の OTUD7B との結合に重要な部位を免疫沈降法にて解析した。

8.NS5A による OTUD7B 脱ユビキチン化酵素活性への影響

Huh-7.5 細胞に HA-Ub, NS5A-myc-His₆, FLAG-OTUD7B をトランスフェクトし、NS5A による OTUD7B 脱ユビキチン化酵素活性への影響を解析した。

(倫理面の配慮)

取り扱うすべての DNA および病原微生物に関しては適切な封じ込めレベルの実験室で取り扱われた。ヒトの遺伝子解析はおこなっておらず、倫理面に抵触する研究は行っていない。

C. 研究結果

1. Huh7 細胞における ISG15 の誘導

ヒト肝癌細胞株 Huh-7 細胞に IFN- α または IFN- β を添加し 24 時間後に細胞を回収したところ、内在性の ISG15, UBE1L, UbcH8 の発現が誘導された。

2.HCV 感染による ISGylation 系の誘導

Huh-7 細胞に HCV J6/JFH1 を MOI=2 で感染させたところ、48 時間後の ISG15, Herc5 の mRNA 量が有意に上昇した。

3.細胞内に TRIM25 を発現させた場合は NS5A の ISGylation は認められなかったが、Herc5 により、顕著な NS5A の ISGylation が検出された。

4.HCV NS5A の ISGylation の解析

Con1, 0 (genotype 1b), JFH1 (genotype 2a) のいずれの NS5A においても ISGylation が認められた。

5.NS5A 上の ISGylation 部位の解析

NS5A の 1 箇所の Lys 残基だけでなく複数箇所で ISGylation されることが示された。

6.HCV NS5A 蛋白質と脱ユビキチン化酵素 OTUD7B の相互作用解析

Huh-7 細胞に FLAG-OTUD7B と NS5A-myc-His₆ を一過性に発現させたところ、免疫沈降法により両者は相互作用を示した。

7.HCV NS5A 上の OTUD7B との相互作用に重要な部位の解析

NS5A の変異体の解析により、NS5A 上の domain I が OTUD7B との相互作用に重要であることが示された。

8.NS5A による OTUD7B 脱ユビキチン化酵素活性への影響

NS5A のトランスフェクト量を増加させると HA-Ub のシグナルが減少し、NS5A により OTUD7B の脱ユビキチン化酵素活性が促進される可能性が示された。

D. 考察

HCV NS5A 蛋白質は E3 リガーゼ Herc5 により ISGylation されると考えられた。Con1 株の NS5A は IFN- α , β , E1, E2, E3 の強発現、いずれでも ISGylation された。さらに Con1, 0, JFH1 株、いずれの NS5A も ISGylation を受け、genotype

によらず HCV に共通の現象であると考えられた。ISGylation 部位を解析したが、複数箇所 ISGylation を受けることが解り、Lys 残基を Ala 残基に置換し、一つだけ Lys 残基が残った NS5A 変異体を作製して解析を進めている。ISGylation 部位を同定し、そこに変異を導入して HCVcc や HCV レプリコンの複製及ばす影響を解析する予定である。

また、前年度に同定した新規 HCV 結合因子である脱コピキチン化酵素 OTUD7B と NS5A が相互作用を示すことを免疫沉淀法で明らかにした。なかでも NS5A domain I が OTUD7B との相互作用に重要であった。NS5A は OTUD7B の脱コピキチン化酵素活性を促進する可能性が示された。OTUD7B は NF- κ B シグナリングの活性調節をすることが報告されており、HCV NS5A 蛋白質と OTUD7B の相互作用が NF κ B シグナリング、および炎症反応に対してどのような影響を及ぼすか明らかにする必要がある。

E. 結論

1. HCV NS5A 蛋白質は E3 リガーゼ Herc5 により ISGylation が促進された。
2. Con1, 0, JFH1 株、いずれの NS5A も ISGylation を受け、genotype によらず HCV に共通の現象と考えられた。
3. ISGylation 部位を解析したが、複数箇所 ISGylation を受けることが解り、Lys 残基を Ala 残基に置換し、一つだけ Lys 残基が残った NS5A 変異体を作製して解析を進めている。
4. HCV NS5A 蛋白質と脱コピキチン化酵素 OTUD7B が相互作用を示すことが明らかとなった。
5. NS5A domain I が OTUD7B との相互作用に重要である。
6. NS5A は OTUD7B の脱コピキチン化酵素活性を促進する可能性が示された。
7. OTUD7B は NF- κ B シグナリングの活性調節をすることが報告されており、HCV NS5A 蛋白質と OTUD7B の相互作用が NF κ B シグナリングに対してどのような影響を及ぼすか明らかにする必要がある。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 論文発表

1) Ratnoglik SL., Aoki C., Sudarmono P., Komoto M., Deng L., Shoji I., Fuchino H., Kawahara N., and Hotta H. Antiviral activity of extracts from *Morinda citrifolia* leaves and chlorophyll catabolites pheophorbide a and pyropheophorbide a, against hepatitis C virus. *Microbiology and Immunology*, in press.

2) Adianti M., Aoki C., Komoto M., Deng L., Shoji I., Wahyuni T., Lusida M., Soetjipto S., Fuchino H., Kawahara N., and Hotta H. Anti-hepatitis C virus compounds obtained from *Glycyrrhiza uralensis* and other *Glycyrrhiza* species. *Microbiology and Immunology*, in press.

3) Tao RR, Huang JY, Lu YM, Hong LJ, Wang H, Masood MA, Ye WF, Zhu DY, Huang Q, Fukunaga K, Lou YJ, Shoji I., Wilcox CS, Lai EY, Han F. Nitrosative stress induces peroxiredoxin 1 ubiquitination during ischemic insult via E6AP activation in endothelial cells both in vitro and in vivo. *Antioxidants & Redox Signaling*, DOI: 10.1089/ars.2013.5381.

4) Mawatari S., Uto H., Ido A., Nakashima K., Suzuki T., Kanmura S., Kumagai K., Oda K., Tabu K., Tamai T., Moriuchi A., Oketani M., Shimada Y., Sudoh M., Shoji I., and Tsubouchi H. Hepatitis C virus NS3/4A protease inhibits complement activation by

cleaving complement component 4., *PLoS One*, 2013; 8 (12): e82094.

5) Wahyuni TS., Tumewu L., Permanasari AA., Apriani E., Adianti M., Rahman A., Widyawaruyanti A., Lusida MI., Fuad A., Soetjipto, Nasronudin, Fuchino H., Kawahara N., Shoji I., Deng L., Aoki C., and Hotta H. Antiviral activities of Indonesian medicinal plants in the East Java region against hepatitis C virus. *Virology Journal*, 2013, 10 (1): 259, 1-9.

6) Ichimura, T., Taoka, M., Shoji, I., Kato, H., Hatakeyama, S., Isobe, T., and Hachiya, N. 14-3-3 Proteins sequester a pool of soluble TRIM32 ubiquitin ligase to repress autoubiquitination and cytoplasmic body formation., *Journal of Cell Science*, 2013, 126 (Pt9): 2014-26.

7) El-Shamy, A., Shindo, M., Shoji, I., Deng, L., Okuno, T., and Hotta, H. Polymorphisms of the Core, NS3 and NS5A proteins of hepatitis C virus genotype 1b associate with development of hepatocellular carcinoma, *Hepatology*, 2013, 58 (2): 555-63.

2. 学会発表

1) Chen M, Gan X, Deng L, Shoji I, Hotta H. HCV NS5A interacts with SMYD3 and upregulates SMYD3-mediated expression of AGR3 mRNA. 20th International Symposium on Hepatitis C Virus and Related Viruses. Melbourne, Australia, October 6-10, 2013.

2) Deng L, Chen M, Shoji I, Hotta H. HCV upregulates Bim through ROS/JNK signaling pathway leading to Bax-mediated apoptosis. 20th International Symposium on Hepatitis C

Virus and Related Viruses. Melbourne, Australia, October 6-10, 2013.

3) Ratnoglik SL, Jiang DP, Aoki C, Sudarmono P, Deng L, Shoji I, Hotta H. Development of a prophylactic and therapeutic vaccine against Hepatitis C virus. 20th International Symposium on Hepatitis C Virus and Related Viruses. Melbourne, Australia, October 6-10, 2013.

4) Matsui C, Shoji I, Minami N, Sianipar I R, Deng L, Hotta H. Regulation of hepatocyte nuclear factor 1 by hepatitis C virus NS5A protein. 20th International Symposium on Hepatitis C Virus and Related Viruses. Melbourne, Australia, October 6-10, 2013.

5) Hotta H, Aoki C, Ratnoglik SL, Sudarmono P, Komoto M, Deng L, Shoji I, Fuchino H, Kawahara N. Antiviral activity of chlorophyll derivatives, pheophorbide a, chlorin e6 and mono-L-aspartyl chlorin e6 (NPe6), against hepatitis C virus. 20th International Symposium on Hepatitis C Virus and Related Viruses. Melbourne, Australia, October 6-10, 2013.

6) Shoji I. Molecular Mechanisms of HCV-induced glucose metabolism disorder. The 2013 Italy-Japan Liver Workshop. Trapani, Italy, October 20-21, 2013.

7) 勝二郁夫, DENG Lin, 松井千絵子, 堀田博. HCV 感染による糖代謝障害の分子機序. 第 61 回日本ウイルス学会学術集会. シンポジウム, 神戸, 2013 年 11 月.

8) DENG Lin, 陳 明, 勝二郁夫, 堀田博. C 型肝炎ウイルス感染による Bax 活性化の分子

機序の解析. 第 61 回日本ウイルス学会学術集会. 神戸, 2013 年 11 月.

9) Suratno Lulut Ratnoglik, 青木千恵, 河本真理, Pratiwi Sudarmono, Lin Deng, 勝二郁夫, 瀧野裕之, 川原信夫, 堀田博.

Chlorophyll 分解産物 Pheophorbide a、Chlorin e6 及び半合成誘導体 Mono-L-aspartyl chlorin e6 (NPe6) は C 型肝炎ウイルス増殖を阻害する. 第 61 回日本ウイルス学会学術集会, 神戸, 2013 年 11 月.

10) 松井千絵子, 勝二郁夫, 南奈苗, Sianipar Imelda Rosalyn, DENG Lin, 堀田博. HCV NS5A と Hepatocyte nuclear factor (HNF) -1 の相互作用と病態生理. 第 61 回日本ウイルス学会学術集会. 神戸, 2013 年 11 月.

11) 松岡陽子, 朝日朱美, Deng Lin, 勝二郁夫, 堀田博. C 型肝炎ウイルス感染による Smad1/Smad5 経路の脱制御とその分子機序について. 第 61 回日本ウイルス学会学術集会. 神戸, 2013 年 11 月.

12) 竹内健司, 孫 雪東, 千原一泰, Deng Lin, 勝二郁夫, 堀田博, 定清直. C 型肝炎ウイルス非構造蛋白質 NS5A における Fyn-SH2 ドメインとの結合に重要なチロシン残基同定の試み. 第 61 回日本ウイルス学会学術集会. 神戸, 2013 年 11 月.

H. 知的所有権の出願・取得状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

厚生労働科学研究費補助金（肝炎等克服緊急対策研究事業）
分担研究報告書

HCV 複製機構の解析

分担研究者 有海 康雄 熊本大学エイズ学研究センター 准教授
研究協力者 黒木 美沙緒 熊本大学エイズ学研究センター 研究員

研究要旨：C型肝炎ウイルス（HCV）に対する新規抗HCV剤開発には、HCVの生活環と関与する宿主因子の解明が必要不可欠である。これまで我々はP-body因子DDX3及びDDX6 RNAヘリケースをはじめ、ストレス顆粒因子G3BP1、Ataxin2、PABP1がHCV感染により、HCV産生のある脂肪滴周辺にハイジャックされること、そしてこれらP-bodyやストレス顆粒因子がHCV複製に関与することを明らかにしてきた。そこで、本年度は宿主因子を分子標的とした創薬開発のため、新たにHCV複製に関与する以下の宿主因子を同定し、そのHCV生活環における役割について解析を行なった。（1）核内宿主因子DDX5 RNAヘリケース及びクロマチンリモデリング因子INI1/hSNF5がHCVの複製に必要であること、（2）核小体に局在するDDX21 RNAヘリケースがHCV複製に必要であること、そして、（3）ストレス顆粒因子Staufen1及びUPF1がHCVの生活環に必要であることを見出した。

A. 研究目的

これまでのHCV研究において、*in vitro*細胞培養系で効率良く感染性ウイルス粒子を産生することが困難なため、ウイルス粒子形成や出芽機構に関しては不明であった。最近、細胞培養系で感染性HCV粒子を産生可能なJFH1株の開発がブレークスルーとなり、HCV複製における脂質代謝経路の重要性、そして、脂肪滴がHCV粒子産生のある場であることが見出された。実際、我々もHCV感染に伴い、P-bodyに局在していたDDX3及びDDX6 RNAヘリケースやストレス顆粒因子G3BP1、Ataxin2、PABP1が脂肪滴にハイジャックされ、HCV複製に関与していること(Ariumi *et al.* *J. Virol.* 2011)、ESCRTシステムがHCV産

生に利用されていることを明らかにしてきた(Ariumi *et al.* *PLoS One* 2011)。そこで、このような経緯を踏まえ、本研究においてHCV複製や病態に関与する新規宿主因子を同定し、HCVの生活環の全容解明はもとより、細胞培養系における大量スケールのHCV粒子産生の確立を目指し、HCVワクチン開発や宿主因子を分子標的とした新規抗HCV剤の開発につなげたい。

B. 研究方法

（1）細胞内局在の観察

ヒト肝癌細胞株HuH-7由来RSc細胞にHCV-JFH1株を感染させ、感染72時間後に細胞を固定後、抗DDX21抗体(Bethyl社)、及び抗HCV Core抗体(CP-9、CP-11;

特殊免疫研究所)を反応させた後、FITC 結合抗ウサギ抗体及び Cy3 結合抗マウス抗体 (Jackson ImmunoResearch 社) を用いて可視化した。また、核は DAPI で染色を行い、共焦点レーザー顕微鏡 (FV1000、オリンパス社) を用いて細胞内局在を詳細に観察した。また、HuH-7 由来全長 HCV-0 RNA 株複製 0 細胞を用いて、HCV 複製による DDX21 の細胞内局在の変化について観察した。

(2) HCV 複製に關与する宿主因子の同定

shRNA を発現するレンチウイルスベクターを用いて、DDX5、DDX21、INI1/hSNF5、Staufen 1、そして UPF1 をノックダウンさせた RSc 細胞株を樹立し、HCV-JFH1 株を感染させ、感染細胞内の HCV RNA の複製レベルと培養上清中に分泌される Core の発現量をそれぞれ real-time RT-PCR 法、ウエスタンブロット法と ELISA 法で定量した。さらに抗 Core 抗体を用いた細胞免疫染色法により培養上清中に分泌された HCV の感染性を解析した。同様に DDX21 をノックダウンした 0 細胞あるいは HCV-0 株サブゲノムレプリコン s0 細胞の HCV 複製レベルについても real-time RT-PCR 法とウエスタンブロット法により検討を行なった。

(倫理面への配慮)

本研究においては、実験に用いた材料は全てこれまでに確立されているものであり、本年度の研究には、ヒトの臨床材料や実験動物を用いたものがない。そのため倫理面への特段の配慮はなかった。但し、本研究は「研究開発等に係る遺伝

子組換え生物等の第二種使用等に当たって執るべき核酸防止処置等を定める省令」に基づき実施した。特に HCV ウイルスを用いた感染実験の場合は P2 レベル実験室のバイオハザード対策用安全キャビネットを使用し、実験終了後の資料についても、UV 照射、次亜塩素酸ナトリウムなどの塩素系消毒薬処理およびオートクレーブを用い、適正に廃棄を行った。

C. 研究結果

(1) 核内宿主因子 DDX5 及び INI1/hSNF5 の HCV 生活環における役割

shRNA を発現するレンチウイルスベクターを用いて内在性 DDX5 及び INI1 をノックダウンさせた RSc 細胞に HCV-JFH1 を感染させると、HCV 感染 96 時間後の細胞内 HCV RNA レベル、細胞内及び培養上清中に放出される HCV Core 発現レベルの顕著な減少がみられた。そして、培養上清中に産生された HCV 粒子の感染性の低下も認められた。しかしながら、JFH1 サブゲノムレプリコン JRN/3-5B 細胞の内在性 DDX5 あるいは INI1 をノックダウンさせても、JFH1 サブゲノム RNA の複製レベルはコントロール細胞に比べて、それほど影響しなかった。

(2) 核小体局在 DDX21 RNA ヘリケースの HCV 生活環における役割

shRNA を発現するレンチウイルスベクターを用いて内在性 DDX21 をノックダウンさせた RSc 細胞に HCV-JFH1 を感染させると、HCV 感染 96 時間後の細胞内 HCV RNA レベル、細胞内及び培養上清中に放出される HCV Core 発現レベルの顕著な減少がみられた。そして、培養上清中に産生さ

れた HCV 粒子の感染性の低下も認められた。同様に全長 HCV-0 RNA 株複製 0 細胞や HCV-0 株サブゲノムレプリコン s0 細胞の内在性 DDX21 をノックダウンさせても、HCV 複製レベルは顕著に減少した。

HCV 非感染 RSc 細胞において、DDX21 は核小体に局在したが、HCV-JFH1 感染細胞においても、DDX21 は核小体に局在したままで特に局在の変化はみられず、HCV Core との共局在は観察されなかった。

(3) ストレス顆粒因子 Staufen 1 及び UPF1 の HCV 生活環における役割

shRNA を発現するレンチウイルスベクターを用いて内在性 Staufen 1 及び UPF1 をノックダウンさせた RSc 細胞に HCV-JFH1 を感染させると、細胞内 HCV RNA レベルの顕著な減少がみられた。そして、培養上清中に産生された HCV 粒子の感染性の低下も認められた。

D. 考察

HCV 生活環に関与する宿主因子として、新たに DDX5、DDX21、INI1/hSNF5、Staufen 1、UPF1 を同定した。これまで、我々は P-body 局在因子 DDX3 及び DDX6 RNA ヘリケースが HCV 複製に必要な宿主因子であることを報告してきた (Ariumi *et al.* *J. Virol.* 2007; Ariumi *et al.* *J. Virol.* 2011)。核に局在する RNA ヘリケース DDX5 は HCV NS5B RNA ポリメラーゼ結合因子としてすでに同定されているが (Goh *et al.* *J. Virol.* 2004)、本年度の研究により HCV 感染・複製への関与が明らかとなった。また、DDX5 が肝硬変における肝の線維化との関与が示唆されており (Huang *et al.* *Gastroenterology* 2006)、HCV

複製や HCV 関連疾患の病態を解明する上で DDX5 が重要な宿主因子として位置づけられる。さらに、核小体に局在する DDX21 も HCV 複製に必要な宿主因子であることが判明した。興味深いことに核小体に局在する B23 が HCV Core と結合すること (Mai *et al.* *Oncogene* 2006)、そして Nucleolin も HCV NS5B と結合することが報告されており (Hirano *et al.* *JBC* 2003; Shimakami *et al.* *J. Virol.* 2006)、核小体がどのように HCV 複製に関与しているのかについては、今後の研究課題である。最近、我々は、HIV-1 の生活環においても DDX5 や DDX21 が HIV-1 Rev と結合し、Rev 依存的な HIV-1 mRNA の核外輸送促進に関与していることを見出している (Inoue *et al.* *BBRC* 2013)。さらに、yeast two-hybrid 法で HIV-1 インテグラーゼ結合因子として同定された INI1/hSNF5 は、クロマチンリモデリング因子として機能することも知られている。一方、ストレス顆粒因子 Staufen 1 及び UPF1 が HCV の生活環に関与することも見出した。これに関連して、我々は HCV 感染により、感染 36 時間頃、ストレス顆粒が形成されること、そして G3BP1、Ataxin2、PABP1 などのストレス顆粒因子が脂肪滴周辺にリクルートされ、HCV 複製に利用されることを報告してきた (Ariumi *et al.* *J. Virol.* 2011)。細胞内のストレス応答と HCV 複製や病態との関連性が示唆される。最近、Staufen 1 が HIV-1 Gag と結合し、HIV-1 の粒子産生に関与する (Chatel-Chaix *et al.* *MCB* 2004) という報告があるので、Staufen 1 の HCV 粒子産生への関与についても今後検討したい。さらに RNA 結合因子 UPF1

も HIV-1 粒子内に取り込まれ、HIV-1 の感染性に関与することが示唆されている (Serquiña *et al.* *J. Virol.* 2013)。これら RNA 結合因子 Staufen 1 や UPF1、RNA ヘリケースそして HCV RNA との3者における相互作用が HCV 複製制御に重要であると考えられる。

E. 結論

(1) 核に局在するDDX5及びINI1/hSNF5はHCVの生活環に必要な宿主因子であることが示唆された。

(2) 核小体に局在するDDX21はHCVの生活環に必要な宿主因子であることが示唆された。

(3) ストレス顆粒因子Staufen 1及びUPF1はHCVの生活環に必要な宿主因子であることが判明した。

F. 知的所有権の取得状況

特になし

G. 研究発表

1. 論文発表

1. Mori K, Hiraoka O, Ikeda M, Ariumi Y, Hiramoto A, Wataya Y, Kato N. Adenosine kinase is a key determinant for the anti-HCV activity of ribavirin. *Hepatology* 58:1236-1244, 2013
2. Kuroki M, Ariumi Y, Hijikata M, Ikeda M, Dansako H, Wakita T, Shimotohno K, Kato N. PML tumore suppressor protein is required for HCV production. *Biochem. Biophys. Res. Commun.* 430:592-597, 2013
3. Yasuda-Inoue M, Kuroki M, Ariumi Y. DDX3 RNA helicase is required for

HIV-1 Tat function. *Biochem. Biophys. Res. Commun.* 441:607-611, 2013

4. Yasuda-Inoue M, Kuroki M, Ariumi Y. Distinct DDX DEAD-box RNA helicases cooperate to modulate the HIV-1 Rev function. *Biochem. Biophys. Res. Commun.* 434:803-808, 2013
5. Yagita Y, Kuse N, Kuroki K, Gatanaga H, Carlson J, Chikata T, Brumme Z, Murakoshi H, Akahoshi T, Pfeifer N, Mallal S, John M, Ose T, Matsubara H, Kanda R, Fukunaga Y, Honda K, Kawashima Y, Ariumi Y, Oka S, Maenaka K, Takiguchi M. Distinct HIV-1 escape patterns selected by CTLs with identical epitope specificity. *J. Virol.* 87:2253-2263, 2013

2. 学会発表等

(1) 武田 緑、池田 正徳、森 京子、矢野 雅彦、有海 康雄、團迫 浩方、脇田 隆字、加藤 宣之. 骨粗鬆症治療剤であるラロキシフェンの抗HCV活性機構について. 第49回日本肝臓学会総会、東京、2013年6月6-7日

(2) 武田 緑、池田 正徳、森 京子、矢野 雅彦、有海 康雄、團迫 浩方、脇田 隆字、加藤 宣之. 骨粗鬆症治療剤であるラロキシフェンは抗HCV活性を示す. 第28回中国四国ウイルス研究会、広島、2013年6月22-23日

(3) 武田 緑、池田 正徳、森 京子、矢野 雅彦、有海 康雄、團迫 浩方、脇田 隆字、加藤 宣之. 遺伝子型の異なるHCV培養細胞システムを用いたラロキシフェンの抗HCV活性の検討. 第61回日本ウイルス学会学術集会、2013年11月10-12日、神戸国際会議場、神戸

(4) 黒木美沙緒、井上万里子、中島詩織、有海康雄. がん抑制因子はLINE-1のレトロトランスポジションを抑制する. 第61回日本ウイルス学会学術集会, 2013年11月10日~12日, 神戸国際会議場、神戸

(5) 川野広大、黒木美沙緒、有海康雄. HIV-1によるLINE-1レトロトランスポジションの抑制. 第61回日本ウイルス学会学術集会, 2013年11月10日~12日, 神戸国際会議場、神戸

(6) Takeda M, Ikeda M, Mori K, Yano M, Ariumi Y, Dansako H, Wakita T, Kato N. Raloxifene inhibits hepatitis C virus infection and replication. 20th international symposium on hepatitis C virus and related viruses. Melbourne, Australia, October 6-10, 2013

(7) Misao Kuroki, Mariko Yasuda-Inoue, Shiori Nakashima, Yasuo Ariumi. Identification and characterization of novel restriction factors of LINE-1. Cold Spring Harbor Retroviruses Meeting. Cold Spring Harbor, New York, USA, May 20-25, 2013

(8) Yasuo Ariumi, Mariko Yasuda-Inoue, Misao Kuroki. Distinct DDX DEAD-box RNA helicases cooperate to modulate the HIV-1 Rev and Tat function. Cold Spring Harbor Retroviruses Meeting. Cold Spring Harbor, New York, USA, May 20-25, 2013

(9) Yasuo Ariumi and Misao Kuroki. Tumor suppressor proteins negatively regulates the life cycle of LINE-1. FASEB meeting Mobile DNA in mammalian

genomes, June 9-14, 2013, Big Sky, Montana, USA

(10) Yasuo Ariumi, Mariko Yasuda-Inoue, Misao Kuroki. Distinct DDX DEAD-box RNA helicases cooperate to modulate the HIV-1 Rev and Tat function. Frontiers of retrovirology 16-18 September, 2013, Churchill College, Cambridge University, UK

(11) Misao Kuroki, Mariko Yasuda-Inoue, Shiori Nakashima, Yasuo Ariumi. Tumor suppressor proteins restricts LINE-1 retrotransposition. Frontiers of retrovirology September 16-18, 2013, Churchill College, Cambridge University, UK

(12) Kodai Kawano, Misao Kuroki, Yasuo Ariumi. HIV-1 interacts with LINE-1. Keystone symposia Mobile Genetic Elements and Genome Evolution (C2), March 9 - 14, 2014, Santa Fe, New Mexico, USA

(13) Kodai Kawano, Misao Kuroki, Yasuo Ariumi. HIV-1 suppresses LINE-1 retrotransposition. 14th Kumamoto AIDS Seminar. October 29-31, 2013, Kumamoto, Japan

(14) Yasuo Ariumi. P-body, RNA helicase, and HIV-1 life cycle. 14th Kumamoto AIDS Seminar. October 29-31, 2013, Kumamoto, Japan.

